

展望

ウィズ/アフターコロナ時代における新たなアピアランス問題 —オンラインによるビデオ通話がもたらすアピアランス懸念への注目—

矢澤 美香子 武蔵野大学・鈴木 公啓 東京未来大学

A New Appearance Problem in With /After Corona Era -Focusing on the Appearance Concerns of Online Video Calling -

Mikako YAZAWA (Musashino University) and Tomohiro SUZUKI (Tokyo Future University)

As a result of the spread of the Coronavirus disease (COVID-19), a number of problems related to people's appearance have emerged, including Zoom dysmorphia. As online video calls on platforms such as Zoom become commonplace, psychological problems pertaining to selective attention to one's own appearance-related defects and distorted self-perception have surfaced. In this study, I reviewed previous research on appearance problems arising due to the with/after Corona era, and subsequently discussed the new psychological challenges.

Keywords: appearance, with-after Corona, online, video calling, body dysmorphic disorder

アピアランス問題とは

近年、アピアランス(appearance)という言葉が、医療や心理学領域、さらには日常でも用いられ始めている。アピアランスとは、日本語で「外見」を意味する語である。ただし、「外見」というと様々なニュアンスが入り込むこともあり、美容や医療、学術領域においては「アピアランス」と表現されることが多い。

アピアランス問題への関心が高まったのは、がん治療にかかわる領域で扱われ始めたことによる。これまではがん治療にともなう外見変化に対する苦痛やそのケアになかなか目が向けられてこなかったという事実がある(野澤, 2014, Nozawa et al., 2013)。がん治療に伴う外見のケアに関する情報は少なく、医療従事者などの専門家であっても手探りで支援をしてきたのである(鈴木他, 2017)。しかし現在は、国立がん研究センター中央病院に「アピアランス支援センター」が併設されており、がん治療により外見がんやがん治療による外見変化への対処を通じて、がん患者が自分らしく日常生活を送れるための支援を行なっている。また、「がん患者に対するアピアランスケアの手引き 2016 年版」(国立がん研究センター研究開発費がん患者の外見支援に関するガイドラインの

構築に向けた研究班, 2016)やその改訂版(日本がんサポーターズケア学会, 2021)が作成され、医療者ががん患者に対してどのような外見ケアを指導すればよいかの基準が示されるなど、アピアランス支援のあり方が注目されてきている。

では、アピアランス<外見>問題(appearance matters)とはどのようなことを扱う領域なのであろうか。例えば、原田・真覚(2018)によれば、狭義には、正常範囲あるいは社会的に通常とみなされる程度を超えた変形(先天性、後天性などさまざま)における客観的問題を原因とする適応障害に関連した問題を扱う分野とされる。客観的に外見における問題が見える状態、すなわち「可視的差異(visible difference)」があるものを扱う領域といえる。既述のようながん治療における手術や化学療法の副作用によって外見上に観察可能な変容が生じたことに起因する問題である。

しかし近年、アピアランス問題はより広義に扱われることが増えている。客観的問題を必ずしも有していない、主観的問題のみが原因である場合も含まれるようになってきている。例えば、醜形恐怖症(身体醜形障害)やボディイメージの歪みなど、客観的には正常範囲の外見を持つ、

つまり可視的差異がほとんど見られないにも関わらず、自らを醜いと思込む状態(症状)もアピアランス問題として扱われるようになってきている。その理由は、アピアランスに起因する問題への対処法は、可視的差異の有無に関わらず共通するものである(原田・真覚, 2018)ことがわかってきたからである。

アピアランス問題は、Figure1 に示すように、身体的要因(治療関連要因)、社会文化的要因、心理的要因などが複雑に関係し合うことにより発生し、維持されると考えられる。身体的要因において、可視的差異がほとんど見られない状態であっても、何らかの環境的、文化的、社会的な要因を背景とし、認知・感情、行動といった心理的要因に問題が生じると、アピアランス問題として顕在化すると想定される。

近年、このアピアランス問題に大きな影響を及ぼしている要因の一つに、新型コロナウイルス(COVID-19)の感染拡大がある。2020 以降、この出来事によって、人々の生活にさまざまな変化が引き起こされている(以下、この状況をコロナ禍とする)。さらには、今後 COVID-19 と共存し、どう生活していくかということは重要なテーマとなっているが、この状況を「ウィズ・コロナ」という言葉で表現したり、コロナ禍の次の段階を「アフター・コロナ」と呼称することが増えてきている。よって、コロナ禍で人々が

抱えているアピアランス問題にはどのようなものがあるか、またそれらの問題の改善に向けて出来ることは何か、その手がかりを探っていく必要があると考えられる。

そこで、本論文では、まずウィズ/アフターコロナ時代において生じているアピアランス問題を精査し、その心理社会的課題について論考する。中でも、オンラインによるコミュニケーションが急速に広がり、日常化したコロナ禍がもたらす新たなアピアランス問題として、Zoom dysmorphia(ズーム醜形症)に着目してその問題性について論じる。そして、ウィズ/アフターコロナ時代の中で、今後新たに求められるアピアランス研究やアピアランス問題に対する心理的支援のあり方について考察することを目的とする。

新型コロナウイルス感染拡大の影響によるアピアランス問題

コロナ禍は、人々の外見意識の変化にどのような影響を及ぼしているのだろうか。米国の皮膚科医を対象に行なわれた調査では、新型コロナウイルスの感染拡大が続く中で、今まで以上に自分の容姿に不満を感じていると報告する患者は 80%を超えていた(Rice, Siegel, Libby, Graber, & Kourosh, 2021)。また、英国の調査では、COVID-19 に関連する不安が体型不満足感と有

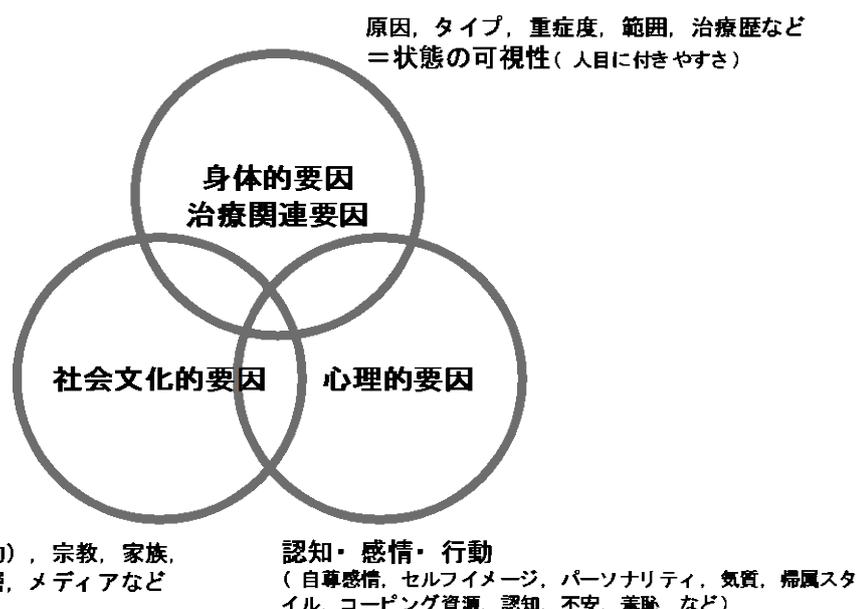


Figure1 アピアランス問題の生起・維持要因
(Clarke, Thompson, Jenkinson, Rumsey, & Newell, 2014 原田・真覚訳 2018 を参考に作成)

意に関連し、COVID-19 に関連する不安とストレスの両方がやせ願望と有意に関連したことが示されている。この要因としては、コロナ禍において運動や食事、睡眠パターンなどの日常生活が急激に変化したことや、それらに伴う体重や体型の変化、そしてそのことに対する不安の増大などが関係している可能性が考えられる(Swami, Horne, & Furnham, 2021)。Robertson et al. (2021) もコロナ禍において、特に女性は男性よりも食事の規制、食べ物へのこだわり、ボディイメージの悪化がみられることを報告している。すなわち、コロナ禍では COVID-19 に関連するストレスと不安が、ボディイメージなどのアピランスに関連する問題に影響を及ぼしていることが示唆されている。

COVID-19 のワクチン接種が進むにつれて、対面活動再開の動きも出てきている。しかし、こうした変化が人々にとって必ずしも肯定的な影響だけをもたらしているわけではない。Silience et al. (2021) の米国の調査によれば、7000 名を超える対象者の 70.6% は対面活動再開に伴う不安やストレスを報告していた。そして、対面活動再開において、外見に関して最も抱く懸念事として、体重増加(37.1%)、皮膚の変色/癬痕(.36%)、およびシワ(24.5%)をあげている。さらに、対面活動再開の不安に対処するため、全体の 30% 以上が外見を変えるために何らかの行動を起こす予定であるとも報告している。

このようにコロナ禍において外見に関連するさまざまな懸念や問題が生じていることがうかがえるが、それらを改善させるための行動の一端は、美容整形手術に関するデータにも表れている。2020 年 7 月 10 日に、BBC ニュースは、「美容整形手術、新型ウイルス流行で増加 日米や韓国」という記事で、米国、日本、韓国、オーストラリアなど全ての国で、唇を厚くする、シワを取る、鼻の形を整えるといった手術の件数が増加していることを報じた (BBC News World, July 10, 2020)。アメリカでは、美容整形手術に費やされた総額が、2019 年が約 82 億ドルであったのに対し、2020 年は約 93 億ドルへと増加したこと (The Aesthetic Society, 2019, 2020) から、COVID-19 によるパンデミックの状況下において美容整形手術の人气が高まったことが示されている。また、Rice et al. (2021) の米国の皮膚科

を対象にした調査では、パンデミック前と比較して、美容相談を希望する患者が増加したと回答した医療機関が 56.7% と半数以上にのぼった。

日本の動向としては、公益社団法人日本美容医療協会が、美容整形は「多くの方にとって不急の医療と考える」とする声明を発表し、今考えている美容医療は感染が収束するまで待つよう、呼びかけを掲出している (公益社団法人日本美容医療協会, 2020 年 4 月 3 日 web 掲載)。しかし、人々の美容整形への関心自体は、一部で高まっている。例えば、株式会社リユニオン (2021) が「美容に月 2 万円以上お金を使っている」と回答した 20 代の働く女性を対象に、「コロナ禍におけるマスク生活や比較的人と会わない状況を受けて、『顔の美容整形』に対する関心が高まったか」を尋ねる調査を実施した。その結果、「非常に思う」と回答した者が 25.5%、「少し思う」と回答した者が 35.5% であったことが報告されている。本調査の対象は、日頃より美容への興味関心が高い層であることが想定されるものの、コロナ禍の生活変化により、その半数以上において、顔の美容整形に対する関心が高まったことを示している。

では、なぜ新型コロナウイルス (COVID-19) の感染拡大が美容整形への関心を高めているのだろうか。その主な理由の一つには、マスク着用の日常化がある (The Aesthetic Society, 2020)。美容整形後は、ダウンタイムと呼ばれる、施術を受けてから普通に日常生活を送れるようになるまで一定の時間を要する場合がある。誰もが常にマスクをしている状況が日常に浸透したことで、美容整形を行った場合でも、顔の手術後の状態を隠せるようになったといえる。また、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、テレワークなど必ずしも出勤を必要としない就業が可能となったことや外出自粛の要請により人と会う機会が減少したことで、ダウンタイムを気にしなくて良くなったということも関係していると推測されている。こうしたマスク着用の日常化が、人々の美容整形へのハードルを下げたと考えられる。

オンラインによるビデオ通話もたらすアピランス問題

新型コロナウイルスの感染拡大が美容整形への関心を高めているもう一つの重要な要因

に、オンラインによるビデオ通話の利用頻度の増加があると考えられる(The Aesthetic Society, 2020)。

そもそも近年、IT ツールの著しい発展により、パソコンやスマートフォンを利用して、オンラインでお互いに顔を見ながら通話ができるコミュニケーションの形態は急速に広がりつつあった。しかし、新型コロナウイルス感染拡大により外出自粛が要請され、人と人とのソーシャルディスタンスを取ることが求められるとともに、人々の日々のコミュニケーション手段のオンライン化が加速した。テレワークを導入した企業が増加したことによる Web 会議システムの利用や、大学等のオンライン授業をはじめ、インターネットを利用した非対面のコミュニケーションが日常化したのである。中でも Zoom の利用者数の増加は著しい。Zoom を利用した 1 日あたりのミーティング参加者数は、全世界で 2019 年 12 月時点では 1,000 万人だったが、2020 年 4 月には 3 億人に上った。国内においては、2020 年 1 月と 4 月を比較すると、無料ユーザーのサインアップ数は 63 倍となった (Zoom Video Communications, 2020)。

こうしたオンライン上で顔を見ながらコミュニケーションをとるビデオ通話の増加によって、人々は日常的にウェブカメラで何時間も、顔を主とした自分自身の姿を見続けるようになった。その結果、ビデオ会議での顔の見え方に対する不安や自意識が高まっていることが明らかとなっている。例えば、Silence et al. (2021) の調査によると、18~24 歳でソーシャルメディアやビデオ会議に費やす時間が増えると、不安が悪化しており、メンタルヘルスサービスの利用が増加していた。さらに、医療機関を対象とした調査結果によれば、患者が新たな美容上の悩みを持つ理由としてビデオ会議の利用をあげていることが 86% の機関から報告された。患者が特に関心を示した体の特定部位については、約 80% の医療機関が「額・目尻」と報告し、目の周囲にあると回答していた。具体的には、上顔面のシワ(77%)、目の下のクマ(64.4%)、顔のシミ(53%)、首のたるみ(50%)が回答されており、患者の関心のある部位は首から上に偏っていた。一方で、首から下の悩みはあまり報告されておらず、ボディラインを整える治療やセルライト治療の増加を指摘した皮膚科医は、10%

未満であった。また、Pikoos, Buzwell, Sharp, & Rossell (2021) の一般成人を対象にした調査では、ビデオ通話の利用の増加によって、新たな外見上の悩みをもった参加者は、パンデミック前と比較して、特にカメラに映る顔の部位を対象とした手術を伴わない低侵襲性の美容処置(シワ取り注射、ダーマフィラーなど)への関心が高まったことを明らかにしている。このようなことから、オンラインで顔を映し出すビデオ通話の機会が増していることは、人々の顔を中心とする外見に関する心配事、すなわち、アピアランス懸念を増加させている可能性が考えられる。

Zoom dysmorphia (ズーム醜形症)

2020 年以降、オンラインによるビデオ通話の増加により、自らの身体を過剰に気にすることや身体を歪んで認識することによって生じる心理的問題が注目を集め、これらは新たに 'Zoom dysmorphia' (ここではズーム醜形症と訳す) と呼ばれるようになった (Rice, Graber & Kourosh., 2020)。ここでの「Zoom」は、Zoom, Google ハングアウト, Microsoft Teams および同様のプログラムを介したビデオ会議やバーチャルなプラットフォームを総称したものとして使用されている (e.g., Rice et al., 2020; Mithawala & Davis, 2021)。Zoom dysmorphia は、まだ明確な診断基準があるわけではない。しかし、身体醜形障害(醜形恐怖症; body dysmorphic disorder) との関連が指摘されており、Zoom dysmorphia に関連する研究では外見に関連する醜形懸念の傾向を測定する the Dysmorphic Concern Questionnaire (DCQ; e.g., Oosthuizen et al., 1998) などがしばしば使用されている。

2015 年には、顔を加工するフィルター機能を備えたアプリを使用することにより、自らの身体への過度の懸念が生じて問題を呈する Snapchat dysmorphia (ここではスナップチャット醜形症と訳す) という言葉が生まれ、議論された。しかし、Snapchat dysmorphia が静止画上の情報に起因する問題であるのに対し、Zoom dysmorphia は、動画上の情報に起因する問題である。また、Snapchat の利用者は、フィルターを利用して作られた自分の姿を見ていることを認識しているが、ビデオ通話の利用者は、自分の外見が歪められていることを認識してい

ない可能性がある。そもそもウェブカメラには歪曲効果があり、外見を不正確に表現するものである。例えば、Webカメラは、必然的に短い焦点距離で記録することになるため、全体的に丸みを帯びた顔や目の幅、鼻が広く生成される傾向がある (Třebický, Fialová, Kleisner, & Havlíček, 2016)。しかし、このことは、あまり一般に知られていない。それゆえに、歪んで映し出された自己の映像に長時間さらされることにより、顔を中心とした自己の外見の認識に自ずと歪みが生じてしまう可能性が考えられる。加えて、Zoomなどのビデオ通話では、自分の感情がリアルタイムで表示されるため、ユーザーは自分が話している様子や他人に反応している様子を見ることになる。その結果、鏡を見ているときには見慣れない表情ジワや顔のシワに気づくこともある。さらに、自分の姿が他のメンバーと並んで表示されるため、比較して自己判断することもできてしまうのである (Rice et al, 2021)。Pikoos et al. (2021) のビデオの使用行動と外見上の不満や美容処置への関心との関連について検討した研究では、半数以上の参加者が、ビデオ通話中に自分の顔と他人の顔を組み合わせで見ていることが報告されている。また、Cristel, Demesh, & Dayan (2020)によれば、顔面の美容整形治療の経験がない調査対象者のうち、約40%がビデオ会議中に外見を気にして美容的治療を計画していたことが報告されている。特に、前頭部や眉間のシワ、肌全体の質感、頬や首などに注目し、懸念を持っていることが挙げられていた。このことは、欠点に気づくとそのことだけに集中し、他の人も同じように気づいていると思ってしまうといった、確認バイアスや焦点錯覚からも説明されている。したがって、自己認識の歪みや頻回な自他の比較、ネガティブに認識されたアピランス部分への選択的注目といった要素が、自らの外見を改善するための処置に駆り立て、美容相談や美容整形の増加に関連している可能性が考えられる。これらは、Zoom dysmorphia を強める要因ともなり得るだろう。

さらなる問題は、最近では、ビデオ通話であっても、外見を加工できるフィルター機能が備わっているものもある。この機能を利用するかどうかによっても、心理的な影響に相違が見られる。例えば、Silence et al. (2021) によれば、調査

対象者のうちオンライン会議中にフィルターを使用した18~24歳は、フィルターを使用していなかった者に比べて、パンデミック後、対面活動に戻ることに伴う不安をより高く報告していた。また同様に、フィルターを使用した者の65%がメンタルヘルスサービスを求めているのに対し、フィルターを使用しなかった者は40%という結果であった。

仮想的なプラットフォームを主としたコミュニケーションが日常化し、現実的な場面でのコミュニケーションが非日常化した状況が長期に続くことで、現実場面が日常化していくことへの不安が強まっていることが想定される。場合によっては、現実場面の回避へとつながる可能性も考えられるだろう。そしてそれは、外見にかかわる不安についても同様といえる。外見についての不安が高まると、現実場面での人への会合に抵抗感を持つことや外出を控えること、必要以上に外見を変える対処をとることなどの、いわゆる回避行動や安全行動につながる可能性がある。Zoom dysmorphia 傾向が強まることにより、本来は不必要である美容処置や美容整形が、現実場面に対峙するための手段として用いられることも懸念される。

しかし、コロナ禍によって美容サービスや美容処置を受ける機関が利用できない状況は、Zoom dysmorphia 傾向を含む醜形懸念の高い者にとって、本質的には悪影響ばかりではないことも示されている。確かに、コロナ禍において、醜形懸念の高い(臨床的に重大な問題を持つ可能性が高い)者は、低い者に比べて、美容サービス機関が閉鎖され利用できないことによって高い苦痛度を報告していた。また、外科的および非外科的美容介入を含むほぼすべての治療を受けたいという願望が高まっていた (Pikoos, Buzwell, Sharp & Rossell, 2020)。しかし、醜形懸念の高い者にとって、美容サービスや美容処置を求めることや利用することは、一種の安全行動として機能していると考えられ、短期的には外見に関連する不安を和らげるのに役立つものの、長期的には外見に過度に集中させる可能性がある (Wilhelm, Phillips & Steketee, 2013)。すなわち、美容サービスや美容処置を施す機関へのアクセスが制限されることは、長期的には、醜形懸念の高い人々にとって有益である可能性もある (Pikoos et al., 2020) と考察する研究もあ

る。

ウィズ/アフターコロナにおいて考えるアピランス問題と心理的介入への課題

本論文では、Zoom dysmorphia(ズーム醜形症)をはじめ、ウィズ/アフターコロナ時代において生じているアピランス問題を概観しながら、その問題性について論じてきた。今後、新型コロナウイルスワクチンの接種が進み、治療薬も開発され、その投与が容易なものとなれば、次第に人々の社会活動は戻っていくであろうことが予想される。しかし、コロナ禍前の生活に戻るには、相当な時間を要すると考えられる。また、ニューノーマルとされる新たな生活様式の中には、ウィズ/アフターコロナの時代において定着していくものが多くあることも推測される。例えば、2021年7月実施の労働者を対象とした調査(公益財団法人 日本生産性本部, 2021)では、50%以上の回答者が、web 会議の普及はコロナ禍収束後起こり得る変化としてあげている。

では、こうした時代、状況の中で、新たなアピランス問題に対して、今後どのような研究や心理的支援が求められるだろうか。

まずは、コロナ禍において生じつつある新たなアピランス問題について、日本の実態を明らかにする研究が必要であると考えられる。本論文で概観した先行研究はじめ、COVID-19 感染拡大の影響によるアピランス問題に関する学術研究は、海外で行われたものが多く、日本におけるこれらの問題の状況、実態はまだ明らかではない。こうした問題があること自体に目が向けられていないのが現状である。よって、日本においても、ウィズ/アフター・コロナの時代においてみられるアピランス問題の実態を調査し、制約がある中でもアピランスを楽しむ心理的余裕や心身の健康の維持、増進にむけた取り組みを考えていく必要があるだろう。

また、新たなアピランス問題の生起、維持要因を検討し、メカニズムを明らかにしていくことが必要であるといえる。その足掛かりとして、ここでは本論文をもとにコロナ禍における新たなアピランス問題の生起・維持要因を図1から整理してみたい。まず、身体的要因としては、可視的差異によるもの(例: 運動不足による肥満、ストレスや感染に伴う体重減少など)と、可視的差異に因らないもの(例: web カメラ等に

よって映し出される正確ではない顔、体型)があるといえるだろう。また、社会文化的要因としては、コミュニケーション様式の変化、COVID-19による社会変化、美を求める文化や規範などが挙げられる。心理的要因としては、日常的ストレス、COVID-19 関連ストレス、個々の認知・感情・行動とその変化が含まれると考えられる。これらが複雑に相互作用することによってコロナ禍におけるアピランス問題が生じ、維持されつつあると仮定できるのではないだろうか。今後はこれらを実証的に検討していくことが求められる。

本論文では、これまでのアピランス問題の枠組みに基づきつつ、それを拡張する形で新たなアピランス問題を概観し、今後の研究、心理的支援につながる提言を行なった。しかしながら、今後もマスク着用やテレワークなどの生活が続けば、美容処置や美容整形を受けやすい状況も持続することになり、アピランス問題への心理的支援や介入は喫緊の課題であるともいえよう。従来臨床群にあてはまるような醜形恐怖症(身体醜形障害)にはあてはまらないレベルであっても、オンラインによるコミュニケーションや新たな生活様式に起因したアピランス問題を抱える者は、潜在的に増加していくことが懸念される。したがって、できる限り早期に、予防的介入を見据えて、心理的課題の解決に向けて取り組んでいくことが求められる。

利益相反

申告すべきものなし

引用文献

- BBC News World (2020). 'I can recover at home': Cosmetic surgeons see rise in patients amid pandemic. July 10, 2020 Retrieved from <https://www.bbc.com/news/world-53341771> (2021年9月20日)
- Clarke, A., Thompson, A. R., Jenkinson, E., Rumsey, N., & Newell, R. (2014). *CBT for appearance anxiety: Psychosocial interventions for anxiety due to visible difference*. NJ: John Wiley & Sons, Ltd.(原田耀一・真覚健(訳)(2018). アピランス<外見>問題介入への認知行動療法段階的ケアの枠組みを用いた心理社会的

- 介入マニュアル 福村出版)
- Cristel, R. T., Demesh, D., & Dayan, S. H. (2020). Video conferencing impact on facial appearance: Looking beyond the COVID-19 pandemic. *Facial Plastic Surgery & Aesthetic Medicine*, 22, 238-239.
- 原田輝一・真覚健 (編)(2018). アピアランス〈外見〉問題と包括的ケア構築の試み 医療福祉連携と心理学領域とのコラボレーション 福村出版
- 株式会社リユニオン (2021). 「美容整形への関心」に関する調査 Retrieved from <https://prtmes.jp/main/html/rd/p/000000003.000080417.html> (2021年9月20日)
- 公益財団法人日本美容医療協会 (2020). 新型コロナウイルス (COVID-19) 感染予防に関する日本美容医療協会からのお願い (2020年4月3日) Retrieved from https://www.jaam.or.jp/pdf/20200403_covid-19_patient.pdf. (2021年9月20日)
- 公益財団法人日本生産性本部 (2021). 第7回働く人の意識に関する調査 調査結果レポート Retrieved from https://www.jpc-net.jp/research/assets/pdf/7th_workers_report.pdf (2021年9月23日)
- 国立がん研究センター研究開発費がん患者の外見支援に関するガイドラインの構築に向けた研究班(編) (2016). がん患者に対するアピアランスケアの手引き 2016年版 金原出版
- Mithawala, P. & Davis, D. M. (2021). Underlying body dysmorphic disorder in patients with zoom dysmorphia. *US Pharmacist*, 46(5), HS1-HS6.
- 日本がんサポーターズケア学会 (2021). がん治療におけるアピアランスケアガイドライン 2021年版 第2版 金原出版
- 野澤桂子 (2014). がん治療に伴う外見の変化と悩みに対するサポート *Astellas Square*, 59, 16-17.
- Nozawa K., Shimizu C., Kakimoto M., Mizota Y., Yamamoto S., Takahashi Y., Ito, A., Izumi, H., & Fujiwara, Y. (2013). Quantitative assessment of appearance changes and related distress in cancer patients. *Psycho-Oncology*, 22, 2140-2147.
- Oosthuizen, P., Lambert, T., & Castle, D. J. (1998). Dysmorphic concern: Prevalence and associations with clinical variables. *Australian and New Zealand Journal of Psychiatry*, 32, 129-132.
- Pikoos, T. D., Buzwell, S., Sharp, G., & Rossell, S. L. (2020). The COVID-19 pandemic: Psychological and behavioral responses to the shutdown of the beauty industry. *International journal of eating disorders*, 53, 1993-2002.
- Pikoos, T. D., Buzwell, S., Sharp, G., & Rossell, S. L. (2021). The Zoom Effect: Exploring the Impact of Video Calling on Appearance Dissatisfaction and Interest in Aesthetic Treatment During the COVID-19 Pandemic. *Aesthetic Surgery Journal*. 41, NP2066-NP2075. <https://doi.org/10.1093/asj/sjab257>
- Rice, S. M., Graber, G., & Kourosh, A. S. A (2020). Pandemic of Dysmorphia: "zooming" into the Perception of Our Appearance. *Facial Plastic Surgery and Aesthetic Medicine*, 22, 401-402.
- Rice, S. M., Siegel, J. A., Libby, T., Graber, E., & Kourosh, A. S. (2021). Zooming into cosmetic procedures during the COVID-19 pandemic: The provider's perspective. *International Journal of Women's Dermatology*, 7, 213-216.
- Robertson, M., Duffy, F., Newman, E., Prieto, B. C., Ates, H. H., & Sharpe, H. (2021). Exploring changes in body image, eating and exercise during the COVID-19 lockdown: A UK survey. *Appetite*. Advance online publication. <https://doi.org/10.1016/j.appet.2020.105062>
- Silence, C., Rice, S., Pollock, S., Lubov, J., Oyesiku, L., Ganeshram, S., Mendez, A., Feeney F., & Kourosh, A. (2021). Life After Lockdown: Zooming Out on Perceptions in the Post-Videoconferencing Era. *International Journal of Women's Dermatology*. Advance online publication. <https://doi.org/10.1016/j.ijwd.2021.08.009>
- 鈴木公啓・上杉英生・野澤桂子・矢澤美香子・藤間勝子・飯野京子・嶋津多恵子・佐川美枝子・綿貫成明・市川智里・栗原美穂・坂本はと恵・栗原陽子 (2017). がん化学療法を受ける患者への脱毛や爪の変化に関する情報提供の内容と方法 東京未来大学研究紀要, 10, 87-95.
- Swami, V. & Horne, G., & Furnham, A. (2021). COVID-19-related stress and anxiety are associated with negative body image in adults from the United Kingdom. *Personality and Individual Differences*. Advance online publication. <https://doi.org/10.1016/j.paid.2020.110426>
- The Aesthetic Society (2019) Aesthetic Plastic Surgery Statistics 2019. Retrieved from https://www.surgery.org/sites/default/files/Aesthetic-Society_Stats2019Book_FINAL.pdf (2021年12月27日)
- The Aesthetic Society (2020). Aesthetic Plastic Surgery Statistics 2020. Retrieved from <https://cdn.theaestheticsociety.org/media/statistics/aestheticplasticsurgerynationaldatabank-2020stats.pdf> (2021年12月27日)
- Třebický, V., Fialová, J., Kleisner, K., & Havlíček, J. (2016). Focal length affects depicted shape and perception of facial images. *PLoS One*, 11(2), e0149313 <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0149313>
- Wilhelm, S., Phillips, K., & Steketee, G. (2013). A

cognitive-behavioral treatment manual for body dysmorphic disorder. New York: Guilford.
Zoom Video Communications (2020). 2020 年を振

り返って (2020 年 12 月 23 日) Retrieved
from <https://blog.zoom.us/ja/2020年を振り返って/> (2021 年 9 月 21 日)

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、人々のアピアランス(外見)に関連するさまざまな問題が現れている。Zoom などのオンラインを利用したビデオ通話が日常化したことで、自らの外見上の欠点への選択的注目や自己認識の歪みなどの心理的問題が生じる Zoom dysmorphia はその一つである。本稿では、ウィズ/アフターコロナの時代に繋がり得るアピアランス問題の先行研究を概観したうえで、新たに直面している心理学的課題について考察した。

キーワード: アピアランス/外見, ウィズ/アフターコロナ, オンライン, ビデオ通話, 身体醜形障害

— 2021.11.29 受稿, 2022.1.8 受理 —